國學院大學学術情報リポジトリ

On quotative expression "-to kiku" in Early Japanese

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Tsujimoto, Osuke
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000249

古代語における引用表現「～と聞く」について

辻本桜介

一、考察対象

本稿では、古代語において「～と聞く」という形で語句を引用する表現を取り上げ、現代語との相違点に注目しながらその意味について考察する。

(1)　「…」とうち歌ふ声、いとめでたし。九の君、いとおかしと聞き給ふ。　（宇津保・嵯峨院・184）

(2)　むすめ多かりと聞きて、なま君達めく人々もおとなひ言ふ、いとあまたありけり。　（源氏・東屋・6-18）

(1)の「～と」は、「聞く」主体（九の君）が抱いた心中言が引用されるものと解釈でき、(2)の「～と」は、「聞く」の主体が他者から伝え聞いた語句が引用されているものと解釈できる。このうち(1)のような「～と聞く」は現代語においては用いられにくい。[1] (1)に対応する現代語の用例を作ると、次の(3)のようにやや不自然になる（少なくとも、述語としては「聞く」より「思う」「感じる」などの方が落ち着きが良いだろう）。

(3)　九の君は、「とても趣き深い」と｛?聞いて／思って／感じて｝いらっしゃる。

また、⑵のように他者の言葉を引用すると解釈できる「～と聞く」の用例も、三節で見るように、現代語と相違する文法的現象が観察される。

古代語の「～と聞く」は、現代語の「～と聞く」とはかなり異なる点を持つが、詳しく扱う先行研究は少ない。[2] 二節では、「～と聞く」について比較的細かい用法分類を提示している近藤（二〇一五）について検討し、「～と聞く」の意味・用法を記述する上での問題点を洗い出したい。

二、近藤政行（二〇一五）について

筆者は以前に、古代から中世にかけての諸資料から「～と聞く」の例を網羅的に抽出し、分析・考察した結果を辻本（二〇一五）において報告した。その際には、主体自身の心中言を引用する用法（認識用法）と、主体が他者から伝え聞いた事柄を引用する用法（伝聞用法）とを区別し、それぞれの意味が史的に変遷することを述べた。古代・中世の「～と聞く」が持つ意味・用法については、それによって整理することができたと考えていたが、その後、本誌一一六巻四号において、やはり「～と聞く」の用法を扱う近藤（二〇一五）が公表された。近藤（二〇一五）は、辻本（二〇一四）でも調査資料の一部とした『今昔物語集』における「～と聞く」の若干例を主たる検討対象とするもので、用法分類も辻本（二〇一四）と大きく異なる点は無いが、やや細かい分類枠を示している。また、近藤（二〇一五）の検討対象は、本稿で扱う上代・中古の用例ではないものの、用法分類の判断基準は他時代の用例にも適用しうるものとなっている。筆者は、近藤（二〇一五）の記述を踏まえて今一度古代語における「～と聞く」の用例を観察していくうちに、辻本（二〇一四）や近藤（二〇一五）における分類方法の妥当性に疑問を感じるようになった。本節では、近藤（二〇一五）による分類について概観し、その問題点を整理したい。

近藤（二〇一四）は、「～と聞く」の用法分類として次に示す「推定キク」「A　他から聞いたことを述べる」「B　…と思って聞く、聞き耳を立てる」「C　聞いて…と思う」の4つを示している。このうち近藤（二〇一五）の主たる分析対象は、音によって「～と」に引用される語句の表す出来事を推定することを表すものとされる「推定キク」である。二節一項～三項でそれぞれの用法について検討を加えたい。

《近藤（二〇一五）における「～と聞く」の用法分類》

「推定キク」

(4)　其ノ後、「俄ニ大風吹テ、大ナル木倒レヌ」ト聞ク。

（今昔・十三・3-233、近藤二〇一五：39の(2)に相当）[3]

「A　他から聞いたことを述べる」

(5)　「東ヨリ馬将来タリ」ト聞ツルヲ、我レハ未ダ不見。

（今昔・二十五・4-393、近藤二〇一五：44の(17)に相当）

「B　…と思って聞く、聞き耳を立てる」

(6)　然テ走リ去テ、「亦ヤ人ヤ有ル」ト聞ケレドモ、音モ無カリケレバ、走廻テ、中ノ御門ニ入テ柱ニ掻副テ立テ、…

（今昔・二十三・4-250、近藤二〇一五：44の(19)に相当）

「C　聞いて…と思う」

(7)　「何ノ男ニカ有ラム」ト思フ程ニ、車ノ共ナル雑色共ノ云ク、「彼ノ男ノ敵ニテ、切殺レタルトナム申ス」ト云ケレバ、則光糸喜シト聞クニ、…

（今昔・二十三・4-251、近藤二〇一五：45の(24)に相当）

(一)「B　…と思って聞く、聞き耳を立てる」について

まず、「推定キク」「A」「B」「C」のうち、「聞く」という動詞の問題として論ずべきものかどうか疑わしい「B　…と思って聞く、聞き耳を立てる」について考える。

もし「聞く」が「聞き耳を立てる」意を持つものであるとすれば、「B」に該当する(6)のような例は、例えば次のような表現と同様の構造を持つことになるだろう。

(8)　一千人ものブラーマンが座って詠唱することもありましたが、一人ひとりはだれの歌がうまいか下手かと聞き耳を立てていたのです。

（BCCWJ／V・S・ナイポール（著）・武藤友治（訳）『インド・新しい顔』）

この例において「～と」に引かれる語句は、後続する述語句「聞き耳を立てる」という行為と併存する、思惟・発話の内容と解される。次のような例と同じ構造と考えると分かりやすい。

(9)　「すみません、お待たせしました」と、額の汗を拭う。

（BCCWJ／赤川次郎『三毛猫ホームズと愛の花束』）

「～と」に引かれる語句を発言するという行為と、後続する述語句の表す行為とは、事実上、同時的に共存しつつも別々になされた行為であると解される。(8)(9)のような構造は、本稿冒頭で見た(1)(2)のような「～と聞く」とは構造の異なるものであろう（(8)(9)のような「～と　述語」の文法的性質については藤田（二〇〇〇）が詳しく論じている）。すなわち「B」とされる「～と聞く」の構造は、(9)のように「聞く」以外のさまざまな述語句で見られる構造であり、[4]「聞く」という動詞の問題として論ずべきではない。本稿では、古代語の用例を分析するに当たり、「B」に相当する分類項目は設けないこととする。

(二)「C　聞いて…と思う」について

次に、近藤（二〇一五：45）における「Cが推定キクと関係があるように見えるが両者には明らかな違いが認められる」という説明に注目したい。近藤（二〇一五）は、「C　聞いて…と思う」とされる「～と聞く」が感想・批評といった主体的表現を受けるのに対し、「推定キク」とされる「～と聞く」は出来事を述べる語句を受けるとし、両者を区別すべきものと説いている。これは、「～と」に引用される文の種類に着目した分類である。「推定キク」とされる(4)と「C」に分類される(7)とを次に再掲するが、これらを見比べると、確かに異なる用法であるかのような印象はある。

(10)　「推定キク」とされる例：　其ノ後、「俄ニ大風吹テ、大ナル木倒レヌ」ト聞ク。　(4)再掲）

(11)　「C　聞いて…と思う」とされる例：　…ト云ケレバ、則光糸喜シト聞クニ、　(7)の一部を再掲）

しかし、近藤（二〇一五）で掲出される「推定キク」の用例は、みな「C」の説明である「聞いて…と思う」という解釈にも当てはまってしまう。(10)は、「（音を聞いて）突然大きな風が吹いて大木が倒れたと思う」と解釈できるし、(11)も「（言葉を聴いて）とてもうれしいと思う」と解釈できるだろう。解釈上、「～と思う」という形で一括できるわけだが、これらのような「～と思う」を文法的に異なる性質の二つの用法として区別することは妥当なのだろうか。この問題について、現代語の「～と思う」の場合に置き換えて考えてみたい。

(12)　周瑜は、刀剣のふれあう音と人の叫びを聞いて、つい

に追いつかれたと思った。
（BCCWJ／今戸榮一『超・三国志-赤壁秘話』）

⒀　私だったら彼女に「割り勘で」って言われたら嬉しいと思うのですが。　（BCCWJ／Yahoo!知恵袋）

⒁の文の主体は、音や叫びという音声情報をもとに「ついに追いつかれた」という出来事を推測している。⒀の文の主体も、「彼女」の発言という音声情報に対し、「嬉しい」という感想を抱いている。それぞれ、「推定キク」及び「C」と同様の意味的構造を持つ例と言える。しかし、こうして見ると、⒁の「思う」と⒀の「思う」との間に文法的に「明かな違いが認められる」のかどうか、直感的にも疑わしいものに思われないだろうか。少なくとも、両者とも心中に生じた言葉を引用する「～と思う」の例であることには変わりない。もし、「～と」における引用語句の種類が異なれば「明かな違いが認められる」ということになるのならば、理論的には無限に分類枠を増やす必要が出てしまうのではないか。例えば次の例では、「～と」に引用される語句が、それぞれ疑問表現・推量表現となっている。これらをもって、述語動詞「思う」の用法として、「推定キク」と同様に「疑問オモウ」「推量オモウ」などを設けていくとするならば、とめどなく用法分類を増やし続けることとなる。

⒁　これは何だろうと思った。（疑問表現の引用）

⒂　犯人は彼に違いないと思った。（推量表現の引用）

本稿では、近藤（二〇一五）の「推定キク」「C」に相当する分類枠は設けず、みな「聞く」主体の脳中に生じた語句を引用するものとして一括することとしたい[5]。ただし以上に述べたことは、「推定キク」「C」に相当するような分類を行うべき文法的な根拠が一切存在しないことを立証するものではない。

㈢　検討すべき問題点―「A　他から聞いたことを述べる」ということ―

最後に、「A　他から聞いたことを述べる」について検討する。主体が他から聞いた言葉を引用する、という用法が存在するならば、その用法は、主体の心中言を引用する「～と聞く」とはっきり異なっていることになりそうである。しかし、次のように、主体の心中で生じた言葉を引用するものとも、主体以外の人物が発した語句を引用するものとも解釈できる例をどのように扱うかに難渋することになる。

⑯「いかばかりならん人か、宮をば消ちたてまつらむ」など言ふほどに、今ぞ車より下りたまふなると聞くほど、かしがましきまで追ひののしりて、とみにも見えたまはず。（源氏・東屋・6–51）

⑰殿は日に添へてもおぼしめし覚まさせ給ふ事なく、いみじくのみおぼしめし歎かせ給ふ。さきうち追ひて参らせ給と聞かせ給ては、まづ入り給ふべき道の障子押しあけ、心して待ちきこえさせ給ひ、よろづにいみじく見ても飽かずおぼしめしつるに、あさましくいはん方なき御心のうちなり。（栄花・二十・下–425）

⑯の「～と聞く」は、主体が車の音を聞いて「いま降車なさるようだ」と推測したものとも解釈できるし、誰かが「いま降車なさるようだ」と発言するのを主体が聞いたものとも解釈できる。⑰の「～と聞く」も、主体が車の音を聞いて「先払いをして参上なさるようだ」と推測したものとも解釈できるし、誰かが「先払いをして参られるようだ」と発言するのを主体が聞いたものとも解釈できる。古代語の「～と聞く」について、近藤（二〇一五）の言う「A」に当たる用法がありそうだという予測は現代語話者の感覚にはなじむものであろうけれども、用例を虚心に眺める限り、この「A」に当たる用法が確かに存在することを認めるべき根拠も、実のところは見出しがたい。

ここで注意すべきは、主体が他から聞いた語句を引用すると解釈できる「～と聞く」も、その語句が主体の把握内容であるという点では、主体の脳中の語を引用する表現と見なせるということである。[6] ⑯⑰も、他から聞いたことが引用されているものとして解釈するにしても、同時に、主体自身の把握内容が引用されているということも認められるだろう。次節で詳しく扱うが、古代語の「～と聞く」の例はみな主体の把握内容を引くものと見ることができる。ならば、「他から聞いたことを述べる」というかなり異質な意味合いは、解釈の上で出てくること以外にも、何らかの文法的な根拠によって認められることなのだろうか。本稿では、このような問題意識から、三節で古代語の「～と聞く」の用例について分析・記述し、四節で考察を行う。

三、現象の記述―現代語と比較して―

本節では、古代語における諸資料の「～と聞く」の用例について、現代語の「～と聞く」との比較を通して分析を行う。

分析に先立ってまず明らかなことは、古代語の「～と聞く」の例には主体自身の心中言を引用するものが存在する点である。本稿冒頭に示した(1)をはじめとして、多くの例が得られる。そこで、そのような心中言を引用するという機能とは別に、主体以外の人物が発した言葉を引用するという異質な機能をも認めなければならないかという点に着目して考察を進めたい。

用例の観察にあたっては、「～と聞く」の意味の解釈には極力触れず、「～と聞く」に関わる構文的な現象の観察に重点を置く。すなわち、「～と聞く」に共起する要素、及び「～と」の内部に生起する要素を記述することによって分析を進める。この方法ならば、前節で見た(16)(17)のような、用例の意味解釈だけでは誰の言葉を引用するか判断しがたい例の扱いが、さしあたっては問題にならない。

さて、次に示す表1は、古代語の諸資料

	「～と聞く」総数	「～と」における引用語句末尾の要素							
		名詞	動詞	形容詞	形容動詞	助動詞	終助詞	言いさし	その他
記紀歌謡	0								
仏足石歌	0								
万葉集	15	4	6	1		4			
続日本紀宣命	1					1			
延喜式祝詞	1					1			
竹取物語	4	1		2		1			
伊勢物語	10		8		1	1			
土佐日記	2			1		1			
平中物語	10	3	7						
落窪物語	43	8	17	5	1	8	1	2	1
蜻蛉日記	72	13	21	5		21	2	8	2
大和物語	24	4	9	1		9			1
宇津保物語	89	14	37	5		25		4	4
枕草子	21		6	3		6	1	3	2
源氏物語	160	26	38	31	1	27	11	18	8
紫式部日記	5		3			2			
夜の寝覚	33	3	10	4		11	2	3	
浜松中納言物語	39	3	15	3		12	3		3
更級日記	11	2	3		1	5			
狭衣物語	77	6	16	6		21	6	13	9
栄花物語	36	6	14	2		4	2		8
古今和歌集	12	7	5						
後撰和歌集	30	10	10	1		7	2		
拾遺和歌集	16	7	6			3			
後拾遺和歌集	10	6	3			1			
合計	721	123	234	70	4	171	30	51	38

表１：古代語における「～と聞く」の引用語句末尾に現れる要素

	総数	き	つ	ぬ	たり・り	けり	けむ	む	むず	ず	じ	まじ	べし	らむ	めり	伝聞なり	断定なり
記紀歌謡	0																
仏足石歌	0																
万葉集	4	2						1									1
続日本紀宣命	1	1															
延喜式祝詞	1										1						
竹取物語	1				1												
伊勢物語	1															1	
土佐日記	1															1	
平中物語	0																
落窪物語	8			1	3	2				1						1	
蜻蛉日記	21	1	2	8		1				1			1			7	
大和物語	9			4	1	3										1	
宇津保物語	25	1		6		5		1		4	1	1	3			1	2
枕草子	6	1				1			1					1		2	
源氏物語	27	1	1	1	5	6	1			4			2			5	1
紫式部日記	2					1										1	
夜の寝覚	11			4	2	1		1		2						1	
浜松中納言物語	12	1		3	2	1		2		1			1			1	
更級日記	5			1						1						2	1
狭衣物語	21			2	3	7		1		1			4	1	2		
栄花物語	4			1	1		1								1		
古今和歌集	0																
後撰和歌集	7			5		2											
拾遺和歌集	3			2	1												
後拾遺和歌集	1												1				
合計	171	8	3	38	19	30	2	6	1	15	2	1	12	2	3	24	5

表２：表１における「助動詞」の内訳

「～と聞く」総数	情報源の標示		引用句「～と」内部末尾の要素												
						助動詞的要素							終助詞的要素		言いさし
	カラ格	ニ格	名詞	動詞	形容詞	た	ず／ない	だ／である	のだ	ている	たものだ	らしい	よ	ではないか	
115	10	2	20	20	2	36	6	19	3	4	1	1	1	1	1

表３：現代語における「～と聞く」の状況（『BCCWJ』による簡単な調査結果）

から得た「～と聞く」の引用語句末尾[7]に現れた要素の分布状況を示したものであり、表2は、表1の「～と聞く」で「助動詞」としている項目の内訳を示したものである。また表3は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（ＢＣＣＷＪ）』を用い、一定の基準[8]により「～と聞く」の用例を採取した結果を示したものである。先に用例の意味解釈には極力触れないことを述べたが、得られた「～と聞く」の用例（７２１例）の中に、「聞く」主体自身が（耳に入っていながらも）頭では把握していない語句を引用する、と解すべき例は見出せなかった。すなわち、古代語の「～と聞く」は、主体の把握内容を引用すると見ることができることになる。これを踏まえ、以下では、他から聞いた語句を引用するという機能が認められるかどうかという角度から、表1～3に示すデータに基づき検討していく。

(一)　情報源となった人物を表す成分が生起しないこと

古代語の状況を観察する前に、まず現代語の「～と聞く」について考えたい。表3で「情報源の標示」とした項目には、次のように、引用語句の情報源となった人物を表す成分が、カラ格またはニ格で現れた例を集計してある。

⑱ a.〈カラ格〉淡いピンクのエプロン。「アルプスの少女」をイメージしたものだと、入店時に春菜は店長から聞いた。
（ＢＣＣＷＪ／桐葉揺『濡れる制服美女』）

b.〈ニ格〉知り合いに、大久保にうまいタイ料理の店があると聞いてやって来ただけだった。
（ＢＣＣＷＪ／馳星周『古惑仔』）

「～と」に引かれる語句が、カラ格やニ格の成分によって「聞く」主体以外の人物のものであることが明示されている。このような成分が共起しうることは、近藤（二〇一五）の「C　他から聞いたことを述べる」という機能を認める根拠の一つと言えよう。現代語においてこのようにカラ格・ニ格で情報源が標示される実例の数は、表3で示す115例の「～と聞く」のうち12例であるから、使用頻度にしておよそ一割程度である。

一方、古代語の諸資料から得た「～と聞く」721例を観察する限り、情報源となる人物を示す成分が共起する例は見出しがたい。古代語で起点を表す成分としてはヨリ格などが想定されるが、そうした格成分によって「～と聞く」に引かれる語句の情報源となった人物を示すことは無いのである。

(二) 過去表現の引用が起こりにくいこと

次に、引用句「～と」の内部に現れる語句の状況について検討したい。これについてもまず表3によって現代語の状況を見ると、助動詞的要素の「た」の使用頻度が高い。

(19) a. 「子産殿の身になにか？」「三ヵ月ほど前に亡くなられた、と聞きましたよ…」
（BCCWJ／伴野朗『伍子胥』）

b. 北京の博物館に「ジンギスカン」のしゃれこうべが展示されている。見物客がそれを見て係員に尋ねた。「このしゃれこうべは小ぶりですね？ジンギスカンは大男だったと聞いているけど」
（BCCWJ／中嶋秀隆『日英対訳ジョーク集』）

(19a)の「亡くなられた」は、「聞く」時点から見て過去の事柄であり、(19b)の「大男だった」も、「聞く」時点から見て過去の事柄である。収集した「～たと聞く」の例はみなこのように「聞く」主体が過去の事柄を把握する意で捉えられる。「た」の用例が多いのは、日本人の言語生活において、他者が「聞く」主体に対し過去に起きた事柄を伝えるケースが多いためであろう。

これに対し、古代語における「～と聞く」は、現代語のように過去の事柄を把握する意で用いられることは稀である。表1・2によって古代語の「～と聞く」における引用語句の末尾に現れる要素を確認すると、時間的意味に関わる助動詞（キ・ツ・ヌ・タリ・リ）の中では、キとツの例は合わせて11例[9]と少ないのに対し、(20a)～(20c)のようなヌ・タリ・リの例は合わせて56例と多い。そして、表1に示されるとおり、「～と聞く」の用例の全体としては、(20d)のように助動詞や終助詞の付かない動詞・形容詞（無標の形式）の例が圧倒的に多い。

(20) a. 待つ人は来ぬと聞けどもあらたまの年のみ越ゆる逢坂の関
（後撰集・1303）

b. 二条殿に人据ゑたりと聞くはまことか。
（落窪・二・148）

c. かの人［＝督の君］も、［源氏が］かく渡りたまへりと聞くに、おほけなく心あやまりして、いみじきことども［＝訴え］を書きつづけておこせたまへり。
（源氏・若菜下・4–247）

d. 常にかく遊びたまふゆと聞くを、ついでなくて、親

王の御琴の音の名高きもえ聞かぬぞかし、よきをりなるべし、と思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。

（源氏・橋姫・5-137）

古代語における時間表現の体系については諸説あるが、小島（一九九五）、土岐（二〇一〇，二〇一四）、鈴木（二〇〇九）、大木（二〇〇九）、井島（二〇一一，二〇一四）、福沢（二〇一一）、仁科（二〇一四）などを踏まえると、概ね、ツ・キはテンス的に過去を表し、他の助動詞や無標の形式は非過去の動作・状態を表すと把握できる。この了解に基づけば、古代語の「～と聞く」は、現代語と異なり、「聞く」主体が過去の事柄を把握する意では用いられにくいことが分かる。⒇の引用語句はそれぞれ「待つ人はもう来ている」「二条殿に妻を迎えてある」「このようにいらっしゃっている」「いつもこのように遊んでいらっしゃる」のように解釈でき、「聞く」時点において成立している現状を示すものと言える。古代語の「～と聞く」は、「聞く」時点の事柄を捉える形式ということになる。

四、考察と結論―古代語の「～と聞く」の意味―

三節で見た文法的事実を振り返りつつ、古代語の「～と聞く」の意味について考察する。

まず、引用される語句の情報源となる人物を表す成分が文中に生起するかどうかという、明示的な判断基準を設けると、現代語と古代語との間には三節一項で見たようなはっきりした差が存する。実例が見出せないからといって安易にそうした表現を文法的に不適格なものと断ずることはできないが、情報源となる人物を示す成分が共起しないことは、古代語の「～と聞く」が、主体以外の人物を情報源とするという意味合いを持たないことを示すものと見れば説明がつく。この分析に従えば、古代語の「～と聞く」が主体以外の人物の発言内容を引用するものと解される場合、その解釈は、前後文脈から得られる含意ということになる。

「～と聞く」の引用語句末尾に過去表現を担う形式（キ・ツ）が現れにくい事実は、「～と聞く」が、主体が「聞く」時点の現状として把握している事柄を引用することを示している。もし、主体が耳にした他者の話の内容を引用するものであるとす

れば、その内容が「聞く」時点の現状を示す事柄のみに限られることの説明はつかない。日常生活において、他者が情報としてもたらす事柄は過去の事態であってもよく、実際、現代語を対象とした調査の結果（表3）では、主体が「聞く」時点より過去の事柄を把握することを表す「～と聞く」の例が少なからず出た。現状の把握を示す表現となる理由はおそらく、「聞く」の本来的な意味が「聞く」時点で流れている音を捉えることであって、その音から把握した周辺環境の状況を引用する表現であるため、と説明できるかもしれない[10]。

現代語では、「～から～と聞く」のように情報源となる人物を表す成分が共起するなど、他者の発言を引用することを示す現象も見られるが、古代語の「～と聞く」をことさらに他者の発言を引用する形式だとみなす理由は無いのではないか。情報源となった人物を表す格成分が共起しない事実、および引用語句内部に過去表現が現れにくい事実から考えて、「～と聞く」は、〝他から聞いたこと〟を引用するものではなく、〝主体が聴覚によって把握した現状〟を引用するものである、という見方が妥当だろう。このように見ることで、古代語の全ての「～と聞く」の例を一貫した捉え方で解することが可能である。

(21)「狐の人に変化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす。

（源氏・手習・6–282）

(22)あかつきの風にあはせて弾き給へる音の、いふかぎりなくおもしろきを、大臣もおどろかされて、「めづらかに、ゆゆしくかなし」と聞き給ふ。（寝覚・一・49）

(21)の「聞く」主体は、「聞く」時点において起こる現象として「狐が人に化ける」という事柄を把握している。また、(22)の「聞く」主体も、「聞く」時点の現状として、琵琶の音が「滅多になく非常にいとおしい」ことを把握している。(21)の「～と聞く」は、主体が他から聞いた情報としての解釈も可能だろうが、そうした解釈は文中の要素のみからは得られず、文脈に依存するものである。いずれにしても、主体の脳中にある語句が「～と」に引かれる点では共通している。

以上の分析結果を図示すると表4のようになる。現代語の「～と聞く」は他者の言葉から何らかの情報を把握する意を表し[11]、引用句「～と」にはその把握内容を表す語句が現れる。これに対し古代語における「～と聞く」は、「耳で得た音声情報から現状を把握する」という意味を表し、引用句「～と」には、把

握した現状を表す語句が現れる。その引用語句は、主体自身の脳中の語句であるが、文脈によっては他者の言葉を情報源とするものとしての解釈が表立つこともある。

五、おわりに

多くの文法研究においては、ある形式の持つ意味・用法を細かく分類していくという向きが一般的であろうけれども、以上に論じたように、本稿では先行研究で示された古代語における「～と聞く」の分類枠を全て取り払い、〝耳で得た音声情報から現状を把握する〟表現として一括した。従来の分類枠を棄却する本稿の論は、一見すれば、進展した研究を巻き戻すかのごとき印象をもたらすものかもしれないが、言語事実をありのままに眺めた結果として生まれた、新たな見解として提示したい。近藤（二〇一五）は、辻本（二〇一四）の分類を踏まえるものではなかったが、当時の筆者の分類をさらに細分化した面を持ち合わせており、筆者に対し改めて古代語の「～と聞く」について考え直す契機を与えることになった。筆者は、辻本（二〇一四）で報告した内容の全てが誤りだったとは考えていないが、本研究を通じて、用例の解釈上の意味から安易に分類を行うことは避けなければならないことを痛感した。自戒としたい。

解釈上、引用語句は誰の言葉とみなされうるか	主体以外の人物の発言であり、かつ、主体自身の脳中に存する	主体自身の脳中で生じる
古代語の「～と聞く」の意味	耳で得た音声情報から現状を把握する。	
現代語の「～と聞く」の意味	他者の言葉から何らかの情報を把握する。	

表４：古代語と現代語における「～と聞く」の意味および解釈
（調査した実例の状況に基づく）

調査資料（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を［　］に示した。）

○上代――仏足石歌・古事記歌謡：日本古典文学大系／日本書紀歌謡：大野晋（一九五三）『上代仮名遣の研究』岩波書店／延喜式祝詞：沖森卓也（一九九五）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院／続日本紀宣命：北川和秀（一九五三）『続日本紀宣命　校本・総索引』吉川弘文館／万葉集：木下正俊（二〇〇一）『万葉集』塙書房（CD-ROM版）○中古――蜻蛉日記・浜松中納言物語・夜の寝覚・狭衣物語・栄花物語：日本古典文学大系／竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・落窪物語・大和物語・枕草子・源氏物語・更級日記：新編日本古典文学全集／宇津保物語：室城秀之他（一九九九）『うつほ物語の総合研究　本文編』勉誠出版／古今和歌集：築島裕他（一九九四）『東京国立博物館蔵本古今和歌集総索引』古典研

究会／後撰和歌集：工藤重矩（一九九二）『後撰和歌集』和泉書院／拾遺和歌集：片桐洋一（一九七〇）『拾遺和歌集の研究　校本篇　伝本研究篇』大学堂書店／後拾遺和歌集：川村晃生（一九九一）『後拾遺和歌集』和泉書院

※用例の検索に際し、次のものを利用した。

・国文学研究資料館『大系本文データベース』（https://base3.nii.ac.jp/）

・国立国語研究所『日本語歴史コーパス　平安時代編』バージョン2014.3（thhp://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html）

参考文献

足立慶子（一九七〇）「源氏物語の会話表現―引用の形式と実態―」『王朝』二 pp.161-209（王朝文学協会）

井島正博（二〇一一）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房

井島正博（二〇一四）「動詞基本形をめぐる問題」『日本語文法』一四-二 pp.34-49

磯部佳宏（二〇一二）「『とはずがたり』における動詞「聞く」の意味用法」『山口大学文学会志』六二 pp.19-29

大木一夫（二〇〇九）「古代日本語動詞基本形の時間的意味」『国語と国文学』八六-一一 pp.21-31（東京大学国語国文学会）

小島聡子（一九九五）「動詞の終止形による終止―中古仮名文学作品を資料として―」築島裕博士古稀記念会編『国語学論集　築島裕博士古稀記念』汲古書院 pp.220-240

近藤政行（二〇一五）「「聞く」の推定用法―今昔物語集を中心に―」『國學院雑誌』一一六-四 pp.39-52

鈴木泰（二〇〇九）『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房

砂川有里子（一九八八）「引用文の構造と機能―引用文の3つの類型について―」『文芸言語研究　言語篇』一三 pp.73-91（筑波大学文芸・言語学系）

竹内史郎（二〇〇五）「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語語彙史の研究』二四 pp.167-184

辻本桜介（二〇一四）「引用構文「～と聞く」の用法―古代から中世まで―」『日本語学会二〇一四年度秋期大会予稿集』日本語学会 pp.83-90

辻本桜介（二〇一五）「引用句の連接について」『日本語学論集』一一 pp.41-69（東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）

辻本桜介（二〇一六）「古代語における引用表現「～と見る」について―現代語と比較して―」『国語と国文学』九三-一（東京大学国語国文学会）pp.55-68

土岐留美江（二〇一〇）『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房

土岐留美江（二〇一四）「動詞基本形終止文の表す意味―古代語から現代語へ―」『日本語文法』一四-二 pp.17-33

仁科明（二〇一四）「「無色性」と「無標性」―万葉集連動動詞の基本形終止、再考―」『日本語文法』一四-二 pp.50-66

福沢将樹（二〇一一）「推移のヌ」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版 pp.45-65

藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院

藤田保幸（二〇〇一）「文法論としての日本語引用表現の研究のために―再び鎌田修の所論について―」『滋賀大学教育学部紀要』五〇 pp.85-104

藤田保幸（二〇一四）『引用研究史論』和泉書院

山岡洋（二〇〇〇）「日本語の補文時制」『佐野国際情報短期大学研究紀要』一一 pp.61-72

（付記）本稿は、日本語学会二〇一四年度秋季大会において発表した内容を、大幅に修正したものです。発表に際し貴重なご意見を下さいました先生方

に御礼申し上げます。また、本稿は、ＪＳＰＳ科研費（16H07401）の助成を受けたものです。

註

（1）藤田（二〇〇〇）では、現代語における次のような表現の例が指摘されているが、三節で示す現代語での簡単な調査による限りではこうした実例は見出せなかった。少なくとも、古代語では現代語に比べてこうした表現の使用頻度が顕著に高いことは認めてよいと思われる。

（i）へえ、面白いとお聞きでございましたか
（吉川英治『私本太平記（一）』／藤田：二〇〇〇：306の(12)の一部）

（2）磯部（二〇一二）、藤田（二〇一四）は中世語の「～と聞く」に言及しているが、詳しい検討は行っていない。

（3）近藤（二〇一五：39）の掲出例には鉤括弧「　」が付されていないが、近藤（二〇一五）で依拠テキストとして用いられた日本古典文学大系の本文には付いている。他にも近藤（二〇一五）の掲出する例文ではこのような依拠テキストとの相違があるが、以降、言及しないものとする。

（4）このような構造の「～と　述語」の例が古代から確認できることは、足立（一九七〇）・藤田（二〇〇一）・竹内（二〇〇五）・辻本（二〇一五）において示されている。

（5）ちなみに、「くやし」「めやすし」などの情意形容詞・評価形容詞は、出来事を述べる語句ではなく、感想・批評といった主体的表現と言えるが、次の例では、「聞く」主体が他者から得た情報として解釈されるだろう。このようなものも、近藤（二〇一五）で示される基準に従えば、「C　聞いて…と思う」に入ることになってしまう。

（i）汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき
（源氏・若紫・1–230）

（ii）心の中には、かの古人のほのめかしし筋などの、いとどうちおどろかされてものあはれなるに、をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。
（源氏・橋姫・5–155）

（6）現代語の「～と聞く」について藤田（二〇〇〇：315）は「「～ト聞ク」ことは、やや割り切っていえば、「～ト知ル」ことを含意する、といえる」と指摘している。次の分析が正しいとすれば、この「～と知る」に相当する意味は、聴覚で受容するという行為の結果として出る含意に過ぎないというよりは、「聞く」の持つ語彙的な意味と認めて良いと思われる。

（i）ジョンは、太郎が郵便局は駅前にあると言うのを聞いていたが、太郎の話は日本語だったので理解できなかった。

（ii）？ジョンは、太郎から郵便局は駅前にあると聞いていたが、太郎の話は日本語だったので理解していなかった。

微妙な内省判断を要するところであるが、筆者には（ii）がやや落ち着きの悪い言い回しに感じられる。これは、「～と聞く」が主体の知識内容を引用する形式だからではないだろうか。すなわち（ii）では、「～と聞いていたが」の部分でジョンが「郵便局は駅前にある」ことを知っていることが示されるが、このことは、後続内容の「理解していなかった」と矛盾するために、文全体として不自然になっていると考えられないだろうか。

（7）引用語句は、しばしばどこから始まるかが判断できない場合があるが、「と」が直接受けている要素は確実に引用語句の一部をなすものと見られるので、これを集計することとした。

（8）コーパス検索アプリケーション「中納言」を用い、サブコーパスとして「出版／書籍」「図書館」のうち「文学」の非コアデータを指定し（最新のデータである二〇〇五年の出版のものに限定した）、語彙素「聞く」

全例を採取した（敬語形の「お聞きする」も例数に含めた）。そのうち、「～と」が共起する例を全て目視で抽出した。「文学」を指定したのは、古代語の資料になるべく近いジャンルのものを選ぶためである。なお、文末において助動詞的な要素として機能する「と聞く」は省いている（このタイプの「と聞く」の認定基準は砂川（一九八八）に従った）。

（9）これら11例も、次の「亡せにき」「行きたりし」のように、過去の事態として捉えられても、その事態の結果が現在において存続していることが含意されるものに偏る。

（i）［私が］五つ六つばかりなりしほどにや、［侍従が］にはかに胸を病みて亡せにきとなん聞く。（源氏・橋姫・5–163）

（ii）今はいかでさなむ行きたりしとだに人におほく聞かせじ。（枕・九五・190）

引用語句に現れた「～キ」「～ツ」の11例を全て挙げる。

（iii）結果の存続を含意し「聞く」時点の現状を表すと解釈しうるもの（9例）：「緒絶えしにき（緒絶為尓伎）」（万葉・十五・3814）、「［舞を］造り賜ひき（比伎）」（続日本紀宣命・九）、「言ひおきつ」（蜻蛉・上）、「［夫婦仲が］絶えき」（蜻蛉・中）、「亡くなりにたりし」（宇津保・俊蔭）、「亡くなりにき」（浜松・一）、「亡せにき」（源氏・橋姫）、「行きたりし」（枕・九五）、「宇治の御堂造りはてつ」（源氏・東屋）

（iv）「聞く」時点の現状を表すとは解釈しにくいもの（2例）：「［暴風雨に］遭へりき（安敝利伎）」（万葉・十五・3675）、「語りつ」（蜻蛉・下）

（iv）は、本稿で主張していることの例外に見える用例であるため少し検討を加えておきたい。

蜻蛉日記の用例「聞きをよびけるかぎりは「語りつ」と聞きつるを」は、『全講蜻蛉日記』（p.738）によれば「聞きをよびけるかぎりは「語りつ」と」が丸ごと存在しない本（岡倉本・東大本・学習院本など）や、「聞きつるを」が「きしつるを」となっている本（京都大学本）があるとされる。本文上の問題と捉えるべきかもしれない。

万葉集の用例は次のものであり、『校本万葉集』（p.79）によれば特に注意すべき異文は見出せない。ただし、「遭へりき」が読み手の経験した事態であってこの歌の前提（presupposition）となっていることや、「聞きてけむ」のように過去推量の表現が用いられている点に注意すると、「聞く」時点の現状を把握する表現として捉えられる可能性がある。

（v）…遭へりきと都の人は聞きてけむかも（伎吉弖家牟可母）

山岡（二〇〇〇）によれば、現代日本語の補文は原則として主節時を基準とするが、補文が前提化されている場合には、補文が発話時を基準とした時制解釈になりうる。この分析が上代語にも可能であるとすれば、（v）の、詠み手の体験した事柄である「遭へりき」は、過去の事実として前提になっているものと解され、「聞く」時点から見た過去ではなく、（v）の歌が詠まれた時点から見た過去の出来事と解すことができる。主節の「聞く」も過去の時点に位置づけられていることを踏まえると、「遭ふ」も「聞く」もともに（v）が詠まれた時点から見て過去の出来事ということになる。この分析に従えば、過去における「聞く」時点の現状として「遭ふ」という出来事が起きたものと解することができ、現状を把握する意と考えられる古代語の「～と聞く」の一環として捉えられることになろう。

（10）感覚表現の一つである「～と見る」も、古代語においては主体が視認した眼前の出来事を引用内容とする形式であり、それゆえに過去表現の引用が起こりにくいことが分かっている（辻本二〇一六）。「～と見る」の引用語句が視覚によって捉えた周辺環境を表すのと同様に、「～と聞く」の引用語句も聴覚によって捉えた周辺環境を表すのだとすれ

ば、「～と聞く」「～と見る」は共通した構造を持つことになる。

(11) 注1で藤田（二〇〇〇）の示す用例を引いた通り、現代語でも主体の心中で生じた語句を引く「～と聞く」が用いられることがあるようだが、今回行った簡単な調査の結果ではそうした例が見出せなかった。表4で斜線を付した部分は、実例が得られなかったことを示すものである。